

高校生物におけるアクティブ・ラーニングの実践とその効果

○大野智久<sup>1</sup>・板山裕<sup>1</sup>・香川秋沙<sup>1,2</sup>

(<sup>1</sup>東京都立国立高, <sup>2</sup>東京農工大・院・農)

都立国立高校では、3人の教員で1年生の生物基礎(8クラス)を担当しており、全員がアクティブ・ラーニング型の授業(以下、AL型授業)を4月当初より展開している。プリント中心に展開するクラスや、板書中心に展開するクラスなど、担当教員ごとに授業の展開の仕方は様々であるが、生徒が主体的に学ぶ時間を中心にしているという点で授業設計は共通している。また、共通問題で行っている定期考査では、教科書の内容の理解を基盤とした思考・判断の問題を中心としている。授業の様子や定期考査等の分析について報告する。

AL型授業により、授業では、①生徒が非常に活発に学ぶ、②「絶対解」を求めだけでなく「納得解」を求める姿勢が見られる、③わからない部分をお互いに聞きあえる広く緩やかな関係性ができる、④対話の中で理解が深まることを実感する、⑤対話を通じて「問の創造」や「問の追求」を行うことができる、など生徒の学びの活動が見られた。

また、定期考査等の結果を分析すると、①思考力・判断力を要する問題にも高い正答率が出る、②教員間の「教える技術」の差が生じにくくなる、などの傾向が見られた。また、個人の結果だけでなく共に学ぶクラス全体の集団の分布を意識して学ぶ生徒も見られた。これはチームとして成果を挙げる力につながるものである。

実験・観察に関しては、2015年度より1年生全員が課題研究を行っている。研究テーマの設定や、実験計画の作成、実験の実施なども、日常の授業での教科書の内容理解の学びをAL型の授業で展開していることにより、活発に情報交換をしながら進めることができている。

AL型授業により、教科書の内容理解はもちろん、それに加えて「答えのない問」に対して向き合う姿勢や、問を創造し思考する姿勢などの力が身に付く可能性が示唆された。本実践からは、教科の内容理解に加えて、汎用的スキルの獲得の両面においてもAL型授業の効果は高いと考えられる。